

巻頭写真 ギョイトペ遺跡—アゼルバイジャン・日本による共同発掘調査

Göytepe: Azerbaijani-Japanese joint excavation

ギョイトペ遺跡は、南コーカサス3国の一つ、アゼルバイジャン共和国の新石器遺跡の一つである。この地域の考古学調査は、ソ連時代以降は長く空白が続いていたが、2000年代になって自然科学的手法を取り入れた層位的な発掘調査が行われるようになり、南コーカサスの編年確立や、新石器化プロセスについての具体的な議論が可能になりつつある。

ギョイトペ遺跡はその中でも主要な遺跡の一つと言える。この遺跡は、2008年から東京大学とアゼルバイジャン国立科学アカデミーによって発掘が行われてきた。ギョイトペとはトルコ系の言葉で「青い丘」という意味で、西アジアやコーカサスのように日干しレンガを使う地域では、古い建物を壊して地面をならし、その上に新しい建物を建てるので、遺跡は丘状を呈する(写真1)。ギョイトペは高さ8m、直径145mの丘で、遺物の検討と精細な放射性炭素年代測定の結果、前6千年紀半ばの約200年間に居住されたことが分かった(Nishiaki et al., 2015)。

14の居住層が認められており、各層からは日干しレンガでできた直径2~4mの円形建物が密に検出された(写真2)。この円形建物4~5棟が円形に中庭を囲むように付属壁でつながれて、タンバリンのようなユニットを形成している。中庭からはビン(土製貯蔵施設)や炉などが発掘され、生活の場だったことが分かる。ギョイトペの日干しレンガ建物は非常に残りが良く、1m近くの高さまで壁が残っている箇所もあった(写真2)。

土器、石器、骨角器、製粉具などの人工遺物も多数出土しているが、有機物の保存状態も非常に良好で、炭化した植物遺存体は多くの情報をもたらした。現地で調達したドラム缶やミルク桶を工場で加工するなどして、土壌の水洗選別を行った(写真3)。

南コーカサスでは、農耕先進地である西アジア(シリア、トルコなど)に数千年遅れて農耕が始まったが、ソ連時代から南コーカサス新石器の最大の特徴と言われてきたのが、裸性ムギへの傾倒である。同時期の西アジアでは皮性の穀類(エンマーコムギ *Triticum dicoccum* Schrank など)が卓越するのに対し、南コーカサスでは裸性穀類(パンコムギ *T. aestivum* L. など)が新石器の早い時期から主要作物とし



写真1 ギョイトペ遺跡。



写真2 ギョイトペ遺跡発掘区。



写真3 水洗選別装置。



写真4 炭化裸性コムギ (1: 種子, 2: 穂軸; ギョイトペ出土).

て出土する (Lisitsina, 1978)。実際にギョイトペの植物遺存体分析でも、裸性のコムギ・オオムギが主要作物として出土している (写真4)。

西アジアで裸性穀類が独立した作物として確認できるのは、早い地域でも青銅器時代 (前3千年紀) 以降のことである。南コーカサスで裸性ムギが早くから好まれた理由は分かっていないが、裸性ムギは種子を取り出すのが容易で、殻に固く覆われた皮性ムギのように脱穀・粳摺りの重労働が必要ないという利点がある。あるいは、地中海気候の西アジアとは異なり、大陸性の気候には裸性ムギが合っていたのか、在地の食文化には裸性ムギのほうが好ましかったのか、この点は今後の検討課題である。ただ裸性ムギは、厚い殻に守られていない分、虫や鳥に食われやすく長期保存には向かない。ヨモギ属 *Artemisia* のような虫除け効果を持つ植物の種子が、ギョイトペから多数検出されているのも、このような裸性コムギの弱点に対処するのが目的の一つだったのかもしれない (本号, pp. 59-70)。

穀類の遺存体は、圧痕としても見つまっている。日干しレンガには、大量にコムギやオオムギの穂軸や殻が混ぜられていた。また、特に上層出土の土器片には、ワラや穂軸などの繊維質だけではなく、ムギの種子や小穂の圧痕がしばしば見られる (写真5, 6)。縄文土器で示唆されるような儀礼的な意味というよりは、混和材として混ぜたものと思われるが、これも西アジアの植物繊維混和土器とはやや異なる特徴である。

ギョイトペは現在も発掘が続いており、遺跡公園として整備する計画がある。首都バクーからジョージア国境への幹線道路沿いという好アクセスなので、南コーカサスを旅行される際には訪問を検討されたい。

引用文献

- Lisitsina, G. N. 1978. Main types of ancient farming on the Caucasus: On the basis of palaeo-ethnobotanical research. *Berichte der Deutschen Botanischen Gesellschaft* 91: 47-57.
- Nishiaki, Y., Guliyev, F. & Kadowaki, S. 2015. Chronological contexts of the earliest pottery neolithic in the south Caucasus: Radiocarbon dates for Göytepe and Hacı Elamxanlı Tepe, Azerbaijan. *American Journal of Archaeology* 119: 279-294.
- (赤司千恵・西秋良宏・ファルハド=キリエフ Chie Akashi, Yoshihiro Nishiaki and Farhad Guliyev)



写真5 皮性コムギ種子圧痕 (ギョイトペ出土土器).



写真6 六条オオムギ小穂圧痕 (ギョイトペ出土土器).